OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上高地実習報告：自然との距離を問い直すフィールド実習
Author(s)	大谷, 洋介; 宮内, 優太; 金, 世娜 他
Citation	Co* Design NOTE. 2026, 11, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104850
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Co* Design NOTE
Center for the Study of Co* Design, The University of Osaka

No. 11

2026 年 5 月 25 日

上高地実習報告：

自然との距離を問い直すフィールド実習

Authors

大谷洋介　（大阪大学　COデザインセンター）
宮内優太　（大阪大学大学院　情報科学研究科　博士後期課程）
金世娜　（大阪大学大学院　生命機能研究科　博士課程）
山中さわ　（大阪大学大学院　医学系研究科　博士前期課程）
倉本多笑　（大阪大学大学院　生命機能研究科　博士課程）
鹿野祐介　（大阪大学　COデザインセンター）
荒木智子　（大阪大学　学際大学院機構）
山崎吾郎　（大阪大学　COデザインセンター）

CENTER FOR THE STUDY OF CO* DESIGN　大阪大学COデザインセンター

大阪大学 THE UNIVERSITY OF OSAKA

上高地実習報告：
自然との距離を問い直すフィールド実習

大谷洋介（大阪大学　CO デザインセンター）
宮内優太（大阪大学大学院　情報科学研究科　博士後期課程）
金世娜（大阪大学大学院　生命機能研究科　博士課程）
山中さわ（大阪大学大学院　医学系研究科　博士前期課程）
倉本多笑（大阪大学大学院　生命機能研究科　博士課程）
鹿野祐介（大阪大学　CO デザインセンター）
荒木智子（大阪大学　学際大学院機構）
山崎吾郎（大阪大学　CO デザインセンター）

Report on a Field Practicum in Kamikōchi:
Rethinking the Distance between Humans and Nature

Yosuke Otani (Center for the Study of Co* Design, The University of Osaka)
Yuta Miyauchi (Doctoral Program, Graduate School of Information Science and Technology, The University of Osaka)
Sena Kim (Doctoral Program, Graduate School of Frontier Biosciences, The University of Osaka)
Sawa Yamanaka (Master Program, Graduate School of Medicine, The University of Osaka)
Tae Kuramoto (Doctoral Program, Graduate School of Frontier Biosciences, The University of Osaka)
Yusuke Shikano (Center for the Study of Co* Design, The University of Osaka)
Tomoko Araki (Institute for Transdisciplinary Graduate Degree Programs, The University of Osaka)
Goro Yamazaki (Center for the Study of Co* Design, The University of Osaka)

本稿は、大阪大学大学院等高度副プログラム「ヒトはいかにして人になったか」の一環として、2025年度に中部山岳国立公園の上高地エリアにて実施したフィールド実習の報告である。本実習は、国立公園において環境保全、観光利用、野生動物管理が交錯する現場を観察し、人と自然の関係を多角的に捉えることを目的とした。現地の観察とふり返りの議論を通じて、自然公園は、利用と保全、安全と自由、共存と管理といった複数の価値がせめぎ合う現場であり、単純な利害対立の構図には還元できない複雑さをもつことを確認した。また、自然の利用や保全のあり方をめぐって、管理者と利用者のあいだに認識のずれがみられることにも着目した。人・動物・自然の共存は固定的な状態ではなく、摩擦や葛藤を含みながら関係を調整し続ける実践であると考えられる。

This paper reports on a field practicum conducted in the Kamikōchi area of Chūbu-Sangaku National Park during the 2025 academic year as part of the Graduate Program for Advanced Interdisciplinary Studies, “How Homo Sapiens Became Human,” at The University of Osaka. The practicum aimed to examine human–nature relations from multiple perspectives by observing a national park where environmental conservation, tourism, and wildlife management intersect. Through on-site observation and reflective discussions, participants confirmed that natural parks are sites where multiple values, such as use and conservation, safety and freedom, and coexistence and management, come into tension, and that they involve a complexity that cannot be reduced to a simple conflict of interests. The practicum also focused on differences in perception between park managers and visitors regarding how nature should be used and conserved. Based on these observations, coexistence among humans, animals, and nature can be understood not as a fixed condition, but as an ongoing practice of adjusting relationships amid friction and conflict.

【キーワード】人と自然、野生動物管理、自然公園、共存、フィールドワーク
【 Keyword 】 Human-Nature Relations, Wildlife management, National parks, Coexistence, Fieldwork

1. 実習の設計と主要な論点

本稿は、大阪大学が実施する大学院等高度副プログラム「ヒトはいかにして人になったか」の一環として開講された「現代ヒト学入門 III」の実施報告である。同プログラムでは、人と動物、自然と社会の境界で生じる諸課題を手がかりに、人文学と自然科学の知見を交差させ、現代の人間像と社会のあり方を問い直す高度汎用力教育を展開している（詳細は、大阪大学 CO デザインセンターホームページ「ヒトはいかにして人になったか」を参照）。

長野県松本市に位置する上高地をフィールドとして実施した本実習では、「私たちは自然とどのような距離で生きたいのか」という問いを中心に据えた。環境保全と観光利用が交差する国立公園を歩き、そこで働く人たちの実務にふれ、現場で起きている事象を観察することで、人と自然の関わり方を多様な視点で捉えることを目指した。

中部山岳国立公園内にある上高地エリアは、雄大な自然の景観を楽しむ観光地であり、多くの管理実務によって維持されてきた自然公園でもあり、また、野生動物が暮らす場所でもある（図 1）。

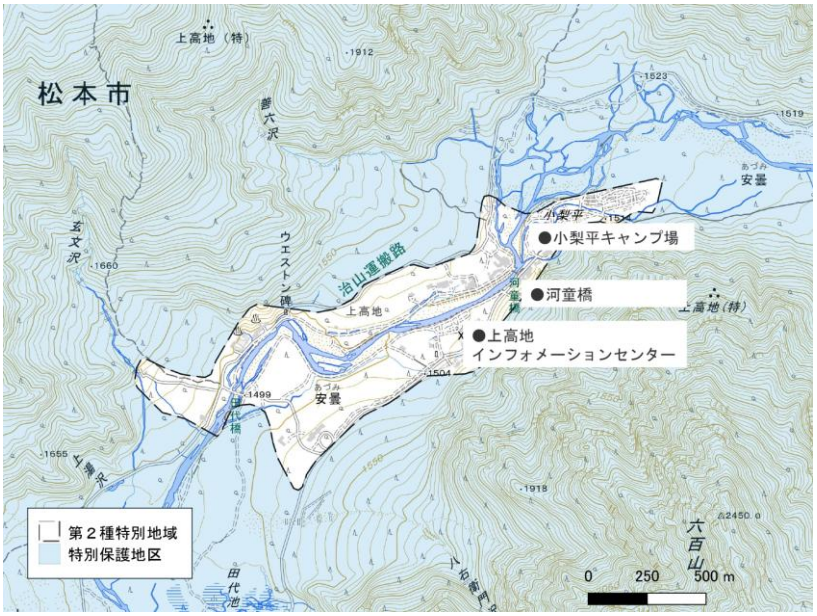


図 1：上高地周辺の地図

上高地は中部山岳国立公園の中に位置する。自然公園法に基づく特別保護地区に周囲を囲まれ、第 2 種特別地区（傑出した景観を保護しつつ、農林漁業や軽微な開発行為との調和を図るエリア）に分類されている。上高地インフォメーションセンターはバスターミナルがあり、上高地の玄関口としての役割を果たしている。河童橋周辺は特に観光での利用者が多い。

出典：QGIS3.44.8-Solothurn を用いて、国土地理院タイル（淡色地図）に環境省自然環境調査 Web-GIS（環境省生物多様性センター）を追記して作成（縮尺 1:10000）

美しい風景の背後には、利用と保全、自由と安全、共存と管理のあいだで揺れ続ける現場がある。今回の実習では、その揺れのなかに身を置くことで、自然をめぐる問題を抽象的な理念としてではなく、具体的な判断の積み重ねとして考えることを重視した。

2025 年度の実習には博士前期課程の学生 4 名が参加した。所属は医学系研究科（保健学専攻）1 名、生命機能研究科（生命機能専攻）2 名、情報科学研究科（システム工学専攻）1 名である。実習では、参加者が同じ場所を歩き、同じ説明に耳を傾けたうえで、それぞれに観察したことを持ち寄って議論する時間を設けた。そのなかで、各自の関心に即した多様な論点が展開された。野生動物管理の難しさに注目した学生もいれば、SNS 時代の観光のあり方に関心を持った学生もいた。現場で働く人たちの語りのなかに人と動物の距離の揺らぎを読み取ったり、また管理者と利用者のあいだにある認識のずれに気づいたりするなど、観察の焦点は多岐にわたった。そうした異なる視点を重ね合わせることで、上高地という場の複層性が明らかになる。

本報告書は、授業内で提出されたレポートに基づいて構成を整えたのち、全体のテーマに合わせて各節を分担執筆した。第 1 節は実習の概要を大谷が執筆し、第 2 節から第 5 節は、実習に参加した学生がそれぞれの観察と考察をもとに執筆した（第 2 節: 宮内、第 3 節: 金、第 4 節: 山中、第 5 節: 倉本）。第 6 節は実習全体をふり返り、その意義を鹿野が総括した。その後、山崎と荒木が各節を統合し、全体の論旨と文体を調整して完成稿とした。したがって本稿は、企画、実施、検討、執筆、編集作業の各段階を複数の立場の参加者が担いながら、協働で作成した記録である。

実習の主題は、「人と動物の関わりからみた国立公園管理の課題」である。とくに、野生動物管理、公園利用者の行動、管理現場の実務が交差する場面に焦点を当て、それらのあいだでどのような利害や価値の調整が行われているのかに注目した。国立公園には、生物多様性や景観を長期的に保全する役割がある一方で、観光や環境教育など、人びとに開かれた利用価値（生態系サービスや文化的・経済的価値）も求められる。保全と利用は相乗的にはたらくこともあるが、しばしば緊張関係を生じさせる。自然を保護するために必要な介入であっても、利用者には不便や違和感として受け取られることがある。逆に、利用の拡大は、地域経済や体験機会を広げる意味では望ましくても、野生動物や植生への負荷を高めてしまうことがある。国立公園の管理は、何が問題なのかという定義そのものが立場によって変わり、対策を講じても別の摩擦が生じやすいという意味で、「やっかいな問題（Wicked Problem）」（Rittel and Webber 1973；堂目・山崎編 2022）である。

中部山岳国立公園の一部である上高地は、年間 160 万人以上が訪れる日本有数の山岳景勝地であり、近年はコロナ禍からの回復とともに利用者数の増加が続いている（松本市 2025）。利用者の増加は国立公園にとって歓迎すべきことであるが、過度な混雑、ルールやマナーの違反、ゴミの放置、野生動物への接近や餌付けなど、さまざまな問題も生じている。とくに、ニホンザルやツキノワグマをめぐっては、来訪者の不用意な行動が咬傷事故や動物の人馴れを招くことが懸念されている（環境省 2024, 2025）。現場では、適正な公園利

用をどう促すか、また野生動物との距離をどう保つかが日々の実務のなかで問われていた。上高地は「自然を楽しむ場所」であるだけではなく、その楽しみ方自体が管理の対象となる場所なのである。

実習は、2025 年 9 月 4 日にオンラインにて実施した事前学習で公園管理の概況を把握したうえで、現地での観察、管理業務への参加、関係者との対話を行い、そのつどふり返りを通じて論点を確認していく形で進めた（図 2）。2025 年 9 月 16 日から 18 日にかけて現地に滞在し、環境省の国立公園管理官、自然公園財団の職員、ホテルやキャンプ場の運営に携わる事業者などから話を聞いた。国立公園管理官からは公園管理に関わる制度や管理の方針について、自然公園財団の職員からは野生動物対策や利用者への対応など日常的な管理業務について、そして事業者からは観光利用や宿泊運営の現場における日々の実務と課題について説明を受けた。また、自然公園財団の職員に公園内を案内していただきながら、ツキノワグマやニホンザル等に関する実務講習、公園管理作業の体験、公園利用者の行動観察などを行った。最終日には、それぞれの学生が実習を通して得た観察記録や考察を整理し、現地の協力者にプレゼンテーションをしてフィードバックのコメントを受けた。コメントは、結論的な意見を受け取るというよりは、現場で判断がなされる際の前提や制約を理解しながら、学生たちが自らの考えを深めていくための手がかりとして活用した。

なお、現地での活動に際しては、事前にクマスプレーの取り扱いを含む危機管理講習を受講したほか、作業時のヘルメット着用、公園ルールの確認など、安全確保に必要な事前準備と対策を行った。

実習の中心的な問いにある「人と自然の距離」は、物理的な接近や隔離だけを意味するものではない。自然をどう理解し、どう利用し、どこまで介入を認め、どのような関係を望ましいものとして構想するかという、ルールと実践の両面にまたがって生じる心理的な距離でもある。上高地の現場で行われているのは、抽象的に共存の理念を掲げるのではなく、複数の価値がせめぎあうなかで、そのつど適切な距離を探り直していく営みである。

以下では、公園内での観察とその後の議論に基づいて、その距離の調整がどのような場面で問題となって現れていたのかを、保全（第 2 節）、観光（第 3 節）、共存（第 4 節）、認識のずれ（第 5 節）という 4 つの観点から記述する。

日付	活動内容	詳細
9/4 **（木）**	自然公園財団職員による事前学習（オンライン）	• 公園管理の現状に関する概論 • 現場における課題 • 実習中の安全管理
9/16 **（火）**	関係者との懇談、野生動物対策講習、安全管理講習、フィールド視察 （上高地インフォメーションセンター）	• 環境省 国立公園管理官との懇談 • 野生動物対策の現状/安全管理に関する講習会 • ツキノワグマ対策講習（遭遇時の対処、被害等） • ニホンザル対策講習（エアガンによる追い払い）
	活動のふり返り	
9/17 **（水）**	公園管理活動の体験、地域事業者との懇談、公園利用者の観察 （上高地インフォメーションセンター、小梨平キャンプ場）	• ニホンジカ対策の体験講習（くくり罠設置） • ツキノワグマ対策の体験講習（遊歩道の刈払い） • ツキノワグマ対策のための誘引物管理施設視察 • 地域事業者（キャンプ場支配人）との懇談 • 公園利用者等の状況観察
	活動のふり返り	
9/18 **（木）**	観察まとめ、成果発表	• グループワーク（観察・体験内容のとりまとめと考察） • グループワーク内容を自然公園財団へ発表

図 2：実習のスケジュール

2. 保全：誰のために自然を守るのか

上高地を訪れて最も強く印象に残ったのは、野生動物の保護や管理が、「人のため」か「自然のため」か、という二者択一では動いていないということである。実際には、そのどちらかを選ぶというよりは、両者のあいだでどのように折り合いがつけられるか、取り得る細かな手続きを模索し、辛抱強く実践していかなければならない。

1992 年の環境と開発に関する国際連合会議以降、生物多様性の保全や野生動物の管理は、国際的な政策課題として定着してきた。生物の多様性に関する条約の前文では、生物多様

性の「内在的価値」とあわせて、生態学的、社会的、経済的、文化的な価値にも言及がある（環境省生物多様性センター 1993）。生物多様性を守ることは、人間社会にとっても意義のあるものとして理解されている。

しかし、自然保護や野生動物管理をめぐる考え方は一様ではない。「野生動物を守る」と言っても、人間社会との関係のなかで守るのか、それとも人の利害から切り離された自然そのものを守るのかによって、正当化される行為は大きく変わる。たとえばクマは、かつては林業被害や人身被害の大きさから駆除の対象とみなされることが多かった。森林では、いわゆるクマハギによって木の樹皮が剥がされ、木材としての商品価値が損なわれることも問題とされてきた（環境省 2022）。そうした被害の蓄積のなかで、クマは守るべき存在というより、排除すべき存在として捉えられてきたのである。ところがその後、絶滅の危険や生物多様性への関心の高まりのなかで、クマは駆除対象ではなく、保護・管理の対象として位置づけ直されることになる。野生動物へのまなざしは固定的なものではなく、社会の価値観や政策の枠組みに応じて変わりうることがわかる。

こうした価値の揺らぎがもたらす影響は、現場で具体的な判断を迫られるときに、よりはっきりと姿を現す。上高地の小梨平キャンプ場では、2020 年 8 月にクマがテント内の食料を漁ろうとして宿泊者を負傷させる人身事故が発生した（環境省 2020）。それ以降、食料管理の徹底、保管用コンテナの整備、キャンプ利用者への食べ物の取り扱いに関する注意喚起、さらに見通しを確保するための広範囲の刈り払いなど、さまざまな対策が講じられてきた。現地を歩くと、こうした対策は抽象的な方針としてではなく、利用のルール、設備の配置、植生管理のかたちで目に見えるものとして実装されていることがわかる（図 3）。



図 3：小梨平キャンプ場の食糧及びごみの管理

小梨平キャンプ場では、食料を金属製のコンテナ（食糧庫）に収容しているほか、金属性のごみ箱を用いたクマ対策を講じている。

これらは一見すると、人の安全を守るための措置である。しかし同時にそれは、クマが人の食べ物の味を覚え、人の生活圏の近くに繰り返し現れるようになることを防ぎ、結果として危険個体として捕獲・駆除される事態を避けるための措置にもなっている。「人の食べ

物はクマにとって覚醒剤のようなものだ」という現地で聞いた説明は、そうした実務感覚を端的に表していた。一度の餌付けや食べ残しが、クマの行動を大きく変えてしまう。人のいる場所への依存を強めてしまえば、不利益を被るのは人だけではない。クマ自身もまた、野生動物としての行動を保てなくなり、最終的には捕獲や駆除の対象になりやすくなる。残飯を出さない、食料を放置しない、見通しの悪い藪を減らすといった対策は、「人を守る」ためだけではなく、クマが人の食べ物に依存したり、人に過度に近づいたりすることを防ぎ、野生動物としての行動を保てるようにするためでもある（環境省 2021, 2023）。この点に気づくと、「人のため」と「自然のため」が、現場ではきれいに分けられないことが見えてくる。

もちろん、こうした介入は、立場によっては違和感を呼び起こすことがある。自然はできるだけ人の手が加わらない状態で保たれるべきだと考えるなら、刈り払いや追い払いは、自然を人にとって都合のよいかたちに変える行為に見えるかもしれない。こうした疑念は理解できるし、実際それは、自然保護をめぐる議論のなかで一般に生じうる。しかし、上高地で観察されたのは、完全な放任と全面的な管理のどちらかに振り切ることのできない現実であった。利用者の安全を確保しながら、動物が人慣れしすぎないようにする必要がある。人が介入せずに放置することだけが、自然に対する正しい態度だとは言い切れない。

「人のため」と「他の生きもののため」とを、どう両立できるのだろうか。現場での管理は、人の安全、動物の生存、生態系の維持、来訪者の理解といった複数の要素のあいだで折り合いを探る営みとして進められていた。それは、自然を人の外部にある対象としてみるのではなく、人もまた自然の一部であり、人の行為が自然を構成してしまうという見方である。いずれか一方の自然観が正しいということではなく、複数の自然観が同時に存在していて、そのあいだで実務が組み立てられている。

その意味で、自然保護は、「できるだけ人の手を加えないこと」や「人の安全を優先すること」のどちらか一方には還元できない。人の安全、野生動物の行動、生態系の維持、来訪者の利用といった複数の要素を考慮しながら、どこに線を引くべきかをそのつど考え直す作業が必要になる。上高地での経験は、「自然を守る」という言葉が単一の意味をもつわけではないこと、そしてその言葉の中身は、現場での判断の積み重ねのなかでしか具体化されないことを示していた。

3. 観光：見る自然から、考える自然へ

「人のため」か「自然のため」かをめぐる複雑な調整は、野生動物管理の場面に限ってなされるものではない。観光のあり方に目を向けると、人びとがどのような自然を求め、どのような距離の取り方で自然公園に関わっているのかという点にも、同じ問題が表れていることがわかる。

近年、上高地の来訪者数は増加している。その背景には、外国人観光客の増加に加えて、若い世代に SNS 等を通じて上高地の魅力が広がっていることがあげられる。松本市の観光動向調査では、若者層は友人・家族等の勧めや SNS の情報をきっかけに、旅行の行き先として上高地を選ぶ傾向があることが示されている（松本市 2024）。

現地でも、河童橋周辺を中心に、景観を背景にして短時間で写真を撮り、次の地点へと移動していく来訪者の姿をよく見かけた。登山や長時間の散策を前提とした装備の人がいる一方で、肌の露出の多い軽装で園内を訪れる人も少なくなかった。そうした服装からは、自然公園という環境やそこで起こり得るリスクへの配慮よりも、写真に写ったときの印象を優先している様子がうかがえた。自然のなかに身を置いてゆっくり過ごすというよりは、目の前の自然を通過しながら、気に入った景色を次々に切り取っていくような観光のスタイルである。

もちろん、写真を撮ることに問題があるわけではない。美しい景観に心を動かされたときに、それを誰かと共有したくなるのは当然の反応だともいえる。人を惹きつける「映える景観」のイメージは、他の人がその場所に関心をもつきっかけとなり、自然に触れる機会を広げる力ともなるだろう。来訪者の増加という点では、自然公園にとっても歓迎すべきことである。

しかし、その場との関わりが「見る」「撮る」「共有する」という短い定型的な行為に終始してしまうと、体験は浅くなりやすい。自己表象を前提とした SNS 的なまなざしのもとでは、目の前の風景は、それ自体に注意を向けて考えたり感じたりする主題ではなく、自分の経験や記録を際立たせるための背景として扱われてしまう。自然そのものとの関係よりも、「ここに来た自分」や「自然を楽しむ自分」を示すことが前面に出やすく、人と自然との相互的な関係性は希薄になってしまう。こうした関わり方では、自然は時間をかけて歩き、感じ、考える対象というより、写真に収めて通過していく対象になりやすい。自然公園財団の職員が語ってくれた話のなかに「消費されてゆく自然」という表現が出てきたが、これは自然との関係が短い印象や投稿可能なイメージとして切り取られてしまう状況の危うさを表しているように思われた。

ここでいう「消費」は、自然が物理的に破壊されるということではなく、自然に触れたときに開かれるはずの感覚や思考の広がりが、短い印象として切り取られたまま終わってしまうことを指している。公園内を流れる梓川の水の冷たさや天候の変化、木々の匂いといった身体的な経験、木道がなぜ必要なのかという利用管理の工夫、クマやサルと人とのあいだで保たれている距離、さらに景観を維持するために日々積み重ねられている管理の仕事。そうしたいくつもの側面に気づく前に体験が終わってしまえば、その場所は「行った」「撮った」「投稿した」で完結してしまう。

現場で話を聞くなかで、自然公園財団の職員は「消費だけではない山の楽しみ方」が必要だとも述べ、そのためには学びが重要だと語っていた。ここでいう学びは、知識を増やせばよいということではなく、自分が見ている風景がどのような関係や管理の上に成立してい

るのかに気づき、その風景との関わり方を少し変えてみるということだろう。自然をどれだけ美しくみるかではなく、その風景の背後にある条件にどこまで目を向けられるかが問われている。

たとえば、美術館や博物館の展示は、情報や価値を伝達するコミュニケーションの場として構成されている（マックリーン 2003）。作品の背景や作者の意図に触れることで、鑑賞者はそこで何が問われているのかを考えるようになる。しかし自然には、そのような作者やキュレーターがいない。山や川や森は、それ自体としてそこにあるように見えるため、自然を前にしたときに何を感じ、何を考えるかは、来訪者の側に委ねられやすい。そのため、美しい景色を見て写真に収めるだけで体験が完結すると、その風景を支えている管理の仕事や、人と動物の距離を保つためのルールの意味は見えなくなってしまう。ここで必要になるのは、来訪者に一方的に知識を与えることではなく、その場所との関わり方を少し変えるきっかけをつくることである。偶然の気づきにまかせるだけではなく、気づきが生まれやすい状態を意図的につくり出すことが重要になる。

そのひとつの方法が、問いを渡すことだろう。梓川の水はどこへ流れていくのか。なぜここでは餌やりが禁止されているのか。なぜ刈り払いが行われるのか。なぜ木道が必要なのか。木道がなければ、この森と私たちの関係はどう変わるのか。サルが人に餌をもらい続けたら、群れはどうなるのか。こうした問いに出会うだけで、自然は単に見る対象ではなく、考える対象へと変わる。問いは正解を教えるためのものではなく、自分の経験を深めるための装置となる。入園の予約時、バスの移動中、ビジターセンター、トイレ、休憩所など来訪者が立ち止まる場面に問いを配置していくことは、ルールの押しつけではなく、関わり方の入口をつくることにつながる。

4. 共存：距離を問い直す絶え間ない実践

人と動物、人と自然のあいだの距離は、決して固定されたものではない。そう考えると、共存という言葉もまた、穏やかな関係ばかりを意味するものではなくなる。共存とは、あらかじめ安定した状態ではなく、安全の確保、自然への配慮、利用の欲求がせめぎ合うなかで、そのつど関係を調整し直していく過程なのである。

現場で聞いた語りにも、それがよく表れていた。小梨平キャンプ場で過去に起きたクマの事故について話を聞いたときも、そのクマはただ「危険な一頭」として語られていたわけではなかった。事業者は、そのクマがどのように行動し、どのような経緯で人の近くに現れるようになったのか、ふだんどのような経路で移動しているかを、個体の特徴や履歴、さらには身にまとった雰囲気まで含めて具体的に話してくれた。そこからは、クマをひとつの動物種や管理対象としてではなく、「あの子」とでも言いたくなるような、固有の存在として受け止めている関係性がうかがえた。

それは、野生動物一般への恐れではない。距離の取り方を誤れば事故につながるという緊張感とともに、距離を誤ってしまった原因となる行動や環境づくりをしてきた人の側の責任が感じられるような語り口である。だからこそ、危険を理解しつつも、すぐに排除したくはないという思いが重なって感じられた。恐れ、責任、愛着、ためらいといった感情が折り重なりながら、野生動物との距離が日々探り直されている。

こうした揺れは、ニホンザルへの対応にも見ることができる。環境省のガイドラインでは、ニホンザルの追い払いは、群れが耕作地や集落に接近・侵入する行動を抑え、人間環境への馴化を進めないための対策として位置づけられている（環境省 2024）。現場でも、サルが人に近づきすぎないよう、エアガンなどを用いて追い払うことがある。外から見れば、攻撃的で「かわいそう」に見えるかもしれない。しかし、サルが人に馴れてしまえば、食べ物を求めて人の近くに定着し、トラブルを引き起こし、結果としてより強い排除の対象になってしまう。短期的には厳しく見える行為が、長期的には人とサルの双方を守るための距離の調整として機能しているのである。

こうした観察から言えるのは、共存は、仲良くすることではないということだ。共存には、互いの生存条件を壊さないように、あえて近づきすぎない関係を作ることも含まれている。人にとって安全な距離は、動物にとっても、人に馴れすぎることなく野生の行動を保つために必要な距離である。逆に、見かけ上は親密で平和に見える接触が、長い目で見れば双方にとって有害である場合もある。野生動物に餌をやること、近距離で写真を撮ること、かわいがって触れようとすることは、その瞬間には好意的に感じられても、動物を人に依存させ、野生で生きる条件を損なう危険をはらんでいる。

そしてこの距離感は、その場にどのような立場で、どの程度の時間関わってきたかによっても異なっている。キャンプ場や宿泊施設などで継続的に現場に関わる人たちは、動物を一時的に出会う対象としてではなく、日々の管理や安全確保のなかで関わり続ける存在として経験しているように感じられた。他方で、観光パンフレットや SNS 上の写真では、動物や自然は「かわいらしい野生」や「美しい風景」として切り取られている。同じ動物を見ていても、現場に継続的に関わる人びとと一時的に訪れる利用者とのあいだで、距離の感じ方に違いが生まれるのは当然である。

動物の行動、季節、利用者数、事故の記憶、管理体制の変化によって、距離のとり方は絶えず変わる。ある場所で安全のために藪を刈れば、景観の印象が変わり、動物の移動経路や利用者の受け止め方も変わる。人の側が何らかの措置を取るたびに、環境は応答し、次の対応が必要になる。共存とは、こうした環境からの応答を受け止めながら、関係を組み替え続けることでもある。

共存という言葉だけを見ると、そこには調和や平和のイメージがまとわりつく。しかし上高地で見えてきたのは、そうした語感だけでは捉えきれない重層的な現実であった。対立や不快感、誤解や批判を抱えたまま、それでも破局を避けるために関係を組み立てていくこと。共感と危機回避のあいだで微調整を重ねること。その不断の調整のなかに、ここで

いう共存の実質がある。共存とは、距離をなくすことではなく、距離を問い直し続けることで成り立つ絶え間ない実践なのである。

5. 認識のずれ：中間領域としての自然公園

自然との距離は、立場や関与の仕方によって揺れるため、その捉え方にも認識のずれが生じる。行政、公園管理者、地元事業者、住民、研究者、保護団体、短時間だけ訪れる観光客や継続的に来訪するリピーターなど、上高地には多様な人びとが関わっている。それぞれが異なる仕方でこの場所に関わり、異なる期待や関心をもち込んでいるため、同じ上高地を見ていても、その意味づけにはずれが生じうる。

その違いを考えるうえで有効なのが、この場所への関わりの深さである。関わりの深い内部のアクターにとって、上高地は職場であり、生活圏の一部でもある。自然は、愛しむ対象であると同時に、管理し、維持し、ときにその脅威から身を守らなければならない現実である。他方、多くの観光客にとって、上高地は非日常の訪問先であり、パンフレットやウェブサイト、SNS などを通じてあらかじめイメージされた美しい自然を体験する場所である。さらに、野生動物保護を訴える団体、国立公園政策に関わる制度的アクター、学術研究者、メディア関係者なども、それぞれ異なる価値や言語で上高地を捉えている。限られた一つの空間に、こうした複数の視点が幾重にも重なっているのである。

実習でとくに印象的だったのは、管理に携わる側がもつ現場のリアリズムと、外部から訪れる利用者の情緒的な自然観との隔たりである。たとえば刈り払い（図 4） は、管理する側にとってはクマの潜伏場所を減らし、利用者の安全を確保するために必要な措置である。ところが利用者の側からは、それが「自然を壊している」「植物がかわいそうだ」と見えることがある。サルの追い払いも同様で、管理する側には人と野生動物の距離を保つための対応として理解されていても、利用者には「かわいそうな行為」と受け取られやすい。同じ風景や同じ行為を前にしていても、何を問題とみなすかには立場による違いがある。

こうしたずれは、「受益と負担」をめぐる場面にも現れる。上高地では、自然公園の環境や施設を維持するため、トイレのチップ制や各種の協力金が導入されている。トイレのチップ制は、清掃や維持管理、し尿処理などにかかる費用を支えるため、利用者に任意の協力を求める仕組みである。現場で働く人びとにとって、山岳地でインフラを維持するためのコストは切実な問題である。物資の搬入、設備の維持管理、廃棄物処理、安全確保、自然環境への配慮には、都市部とは比較にならない手間がかかる。ところが、利用者の側が都市の公共サービスと同じ感覚でいれば、きれいなトイレが使えてあたり前と考えてしまう。実際、チップ制ということもあり、協力する利用者が全員ではないことは、利用者側の感覚を反映していると推測できる。自然を享受することと、それを支えるための費用や労力との結びつきが見えにくい。

こうした認識のずれは、知識の不足によるものというより、上高地にたどり着くまでに積み上げてきたそれぞれの経験が異なっていることによるものだと考えられる。外部の利用者にとっては、上高地を訪れる前の段階で、写真や観光情報によるイメージがあらかじめ形づくられやすく、そこには泥や糞尿の処理、工事車両、獣害対策、刈り払いといった管理の現実は映りにくい。そのため、現場で管理の痕跡に出会ったときは、それを本来の自然からの逸脱と受け取りやすい。他方、現場に立つ人びとは、美しい自然を保護するという理念を抱きながらも、人が安全に立ち入るためには高度な管理が必要であるという緊張関係



図 4：刈り払い

白枠内が刈り払いされた部分。クマは茂みに隠れて移動するため、刈り払いをして見通しをよくすることで、クマとの不意の遭遇を防ぐことができる。

のなかで仕事をしている。この経験の差が、同じ上高地を見ながら異なる意味づけを生み出すことにつながる。

このずれを無知やわがままとして片づけてしまえば、対立は深まるばかりである。必要なのは、ずれを可視化し、その背景にある経験や価値観を読み解くことである。たとえば、なぜ今この植物を刈っているのか、なぜ餌やりが禁止されているのか、なぜ協力金が必要なのか、といった問いに対して判断の過程を共有することができれば、利用者からの見え方も変わりうる。現場の判断は、自然を一方的にコントロールするためではなく、複数の価値のあいだで折り合いをつけるためになされている。そのことが見えるだけでも、管理は押しつけではなく、この場所を維持するための試行錯誤として理解されやすくなる。

求められているのは、訪問者を景観の消費者ではなく、公園をともに支える関与者として位置づけ直すことではないだろうか。チップや協力金の支払いも、この場所を維持するための参加の一部として意味づけることができる。さらに言えば、誰が何をどう見ているかを読み解くこと自体が、自然公園における学びになりうる。

実習を通して、上高地は美しい風景を楽しむだけの場所ではなく、人が自然と向き合う

ときに生じる葛藤のプロセスを学ぶことができる場所でもあることがみえてきた。上高地は、完全にコントロールされた人工空間でも、人を拒む手つかずの自然でもなく、そのどちらにも振り切れない中間領域として成り立っている。だからこそ、管理者、事業者、利用者などのあいだでは、自然の見方や関わり方をめぐる認識のずれが生じる。しかし、そのずれは、対立を生み出すだけではなく、対話の契機にもなりうる。管理者が抱える葛藤を可視化し、利用者が抱く違和感と突き合わせながら、この場所をどう維持していくかを考えること。その丁寧な往復のなかでこそ、理念が先行しがちな共存は、具体的な実践へと変わっていく。

6. まとめ：自然との距離を問い続ける実習として

ここまで第 2 節から第 5 節にかけて、参加学生がそれぞれの観点から実習を通じて気づき、学んだことを記述してきた。ツキノワグマやニホンザルへの対応、利用者の観光行動、施設や環境の維持管理、管理者と利用者の認識のずれを、現地での観察、管理作業の体験、関係者への聞き取り、参加者同士のふり返りを通じて検討した。そして、国立公園管理の課題は、人と動物、人と自然の距離をどのように調整するかという問題として現れていることを確認した。最後に、それらの内容を踏まえ、各節に共通して見出される視点や問題意識を整理し、本実習全体の意義について総括する。

中心的なテーマとして、共存をどのように捉え直すかが繰り返し取り上げられた。そして、共存を摩擦のない理想的な状態として想定するのではなく、摩擦や緊張関係を引き受けながら、その都度、調整を重ねた結果として暫定的に形成される関係のあり方として捉えようとする視点が提示された。野生動物管理、自然保護、観光利用、価値認識のずれといった各節の主題は一見異なるように見えるが、その根底には、異なる価値や立場のあいだでいかに折り合いの手続きを踏みながら関係を組み立てていくかという、共存の再構築という共通の関心があったといえる。

上高地という場所において、自然は人から切り離された固定的な対象として存在しているわけではない。自然は、管理者、観光利用者、事業者、行政、研究者、野生動物など、多様なアクターとの関わり合いのなかで、その意味や位置づけを変えながら立ち現れている。第 2 節で示されたように、野生動物への対応や環境保全をめぐる判断は、統一的な原理・原則から導かれるものではなく、人の安全、動物の生存、生態系の維持といった複数の価値や目的が併存する状況のなかで、致命的な結果を回避するための暫定的な判断として積み重ねられていた。自然との共存は、このような実践のプロセスを通じて、その都度、相互の関係性を更新し続ける営みとして理解されるべきものであろう。

第 3 節から第 5 節を通して明確になったのは、自然と向き合う人のあり方そのものが問い直しの対象となっているという点である。自然には、あらかじめ与えられた意味や物語は存在しない。だからこそ、人は自然を眺め、消費し、通過するだけの存在としてはありえ

ず、自然との関係性を引き受け、意味を構築する主体として否応なく関与せざるをえない。利用者にとっても、自然をただ享受し消費する主体から、自らが意味づけや関係性の構築に関与する自覚的な主体へと転換することが求められる。そのためには、自然体験を一過性の消費行動として終わらせるのではなく、体験のうちに学びや新たな関係性が生まれるような設計のもとで、対話的なプロセスに参加できる環境を整えることが重要となる。

この点で、国立公園をフィールドとする実習には、設計段階からの丁寧な準備が欠かせない。国立公園は、利用者の安全、野生動物との距離、訪問者や管理作業への影響、関係者との調整など、多くの条件のもとで成り立つ場である。現地での観察や聞き取り、作業体験を行うには、事前学習、危機管理、安全確認、関係機関との調整を組み合わせることが欠かせない。本実習では、これらを踏まえ、現地で見聞きしたことをその日のうちに参加者同士でふり返り、管理の背景にある判断や葛藤を考える活動スケジュールとした。

こうした実習の枠組みは、他の国立公園や自然公園などのフィールドでも応用できるだろう。保全、利用、野生動物管理、地域の事業、利用者の認識がどのように交差しているかを観察し、関係者の語りと参加者同士のふり返りを通じて考える方法は、人と自然の関係を学ぶうえで有効である。ただし、対象となる動植物、観光利用の状況、管理体制、地域社会との関係、安全上のリスクは地域ごとに異なる。そのため、同じ方法をそのまま適用するのではなく、それぞれの現地の条件に応じて実習内容を組み替えることが前提となる。

現場で各々が感じた違和感や驚きは、その場では直感的なものであっても、あとからふり返って言葉にし、観察した結果を整理し、別の視点と突き合わせることで、初めて言語化可能な主題として立ち上がる。本報告書を作成するための協働作業もまた、そうした過程の一部である。上高地というフィールドでの実習を通じて得られたことは、自然をめぐる問いに対する最終的な答えではなく、「私たちは自然とどのような距離で生きたいのか」という答えのない問いに向き合い、その答えを探すための調整に自ら関わる必要があるというコミットメントへの理解である。このような理解を、身をもって経験し、実践知として獲得することこそ、本実習のねらいであり、意義であったといえる。

謝辞

本実習の実施に際して、一般財団法人自然公園財団上高地支部の香取様、環境省国立公園管理官の島様、小梨平キャンプ場支配人の道鬼様をはじめ、多くの関係者の方々より丁寧な案内と説明、さらに意見交換の機会を提供していただきました。上高地における自然保護、公園利用、野生動物管理の実際について、現場の実状に即して学ぶことができたのは、ひとえに協力いただいた皆様のおかげです。ここに記して厚く御礼申し上げます。

文献

大阪大学 CO デザインセンターホームページ「ヒトはいかにして人になったか」

https://cscd.osaka-u.ac.jp/program/ad-human.html（最終閲覧日：2026 年 4 月 13 日）
環境省
[環境省 1993] 環境省生物多様性センター（1993）. 生物の多様性に関する条約（条約本文・日本語訳）. https://www.biodic.go.jp/biolaw/jo_hon.html（最終閲覧日：2026 年 4 月 13 日）
[環境省 2020] 環境省信越自然環境事務所（2020）. 中部山岳国立公園上高地におけるクマによる人身事故の発生について（2020 年 8 月 9 日）. https://chubu.env.go.jp/shinetsu/pre_2020/post_130.html（最終閲覧日：2026 年 4 月 13 日）
[環境省 2021] 環境省上高地管理官事務所（2021）. 上高地地域のツキノワグマ対策 実践マニュアル. https://www.env.go.jp/park/chubu/R3_kamikochi_kumataisaku.pdf（最終閲覧日：2026 年 4 月 13 日）
[環境省 2022] 環境省（2022）. 特定鳥獣保護・管理計画作成のためのガイドライン（クマ類編）改定版. https://www.env.go.jp/nature/choju/plan/plan3-2c/R04_kumaguideline.pdf（最終閲覧日：2026 年 4 月 13 日）
[環境省 2023] 環境省中部山岳国立公園管理事務所（2023）. 上高地地域のツキノワグマ対策実践マニュアル https://www.env.go.jp/park/content/000172083.pdf（最終閲覧日：2026 年 4 月 13 日）
[環境省 2024] 環境省（2024）. 特定鳥獣保護・管理計画作成のためのガイドライン（ニホンザル編）改訂版. https://www.env.go.jp/nature/choju/plan/plan3-2d/nihonzaru.pdf（最終閲覧日：2026 年 4 月 13 日）
[環境省 2025] 環境省（2025）. 中部山岳国立公園 山岳地域におけるツキノワグマ対策指針. https://www.env.go.jp/park/content/000355081.pdf（最終閲覧日：2026 年 4 月 13 日）
堂目卓生・山崎吾郎（編）（2022）. やっかいな問題はみんなで解く. 世界思想社.
マックリーン, K.（2003）. 博物館をみせる：人々のための展示プランニング. 玉川大学出版部.
松本市
[松本市 2024] 松本市（2024）. 松本市観光動向調査報告書 （令和 6 年 3 月）https://www.city.matsumoto.nagano.jp/uploaded/attachment/89878.pdf（最終閲覧日：2026 年 4 月 13 日）
[松本市 2025] 松本市（2025）. 松本市観光地延利用者数（観光入込客数）. https://www.city.matsumoto.nagano.jp/uploaded/attachment/123707.pdf（最終閲覧日：2026 年 4 月 13 日）
Rittel, H. W. J., & Webber, M. M. (1973). Dilemmas in a general theory of planning. Policy Sciences, 4(2), 155–169.

（投稿日：2026 年 4 月 15 日）
（受理日：2026 年 5 月 25 日）

Co* Design NOTE

Center for the Study of Co* Design, The University of Osaka

No.11

2026 年 5 月 25 日

上高地実習報告：
自然との距離を問い直す
フィールド実習

大阪大学 CO デザインセンター

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16
大阪大学豊中キャンパス全学教育推進機構 全学教育総合棟 I（4階）
TEL: 06-6850-6111（代表） https://cscd.osaka-u.ac.jp/

CO* CENTER FOR THE STUDY OF CO* DESIGN

大阪大学 THE UNIVERSITY OF OSAKA